

遊休農地の解消に向けた、農業の活性化を目指す 「農と食の活性化推進プロジェクト」の推進

斑鳩町農業委員会

1. 斑鳩町の農業の概要

農業粗生産額は5億6000万円で、農家戸数552戸・農地面積は322㌔で町の総面積の23.4%である。農家の平均耕作面積は、40㌔を下まわる状況である。農業生産は水稻を中心に、都市近郊の立地条件を活かした、軟弱野菜の小松菜・ホウレン草・ナス・イチゴ。果樹として、日本梨（赤梨）・ブドウ・柿・イチジクなどが栽培されている。

2. 農業委員会の取り組み

①具体的な取り組み内容

斑鳩町農業委員会では平成17年度から、農家数の減少や農家の高齢化による遊休農地の解消に向けた取り組みをスタートさせている。

農業に携わる人が減り、農業への関心も薄れ、遊休農地が増えている。このことから農業委員会が中心となって平成18年6月に、地域資源を活かしつつ農地の効率的な利用と地域の活性化が図れるように、「斑鳩の里・農と食の活性化推進プロジェクト推進委員会」が設立された。

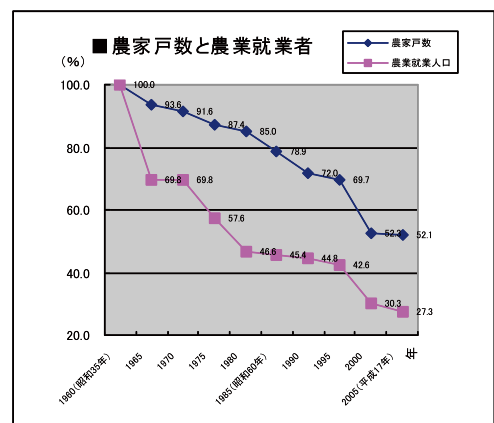


遊休農地

プロジェクトは、遊休農地の問題が深刻な状況になる前に資源である「農地」の有効活用を図り、「人」である地域住民の協力により互いの力を発揮することで、生産力低下の防止と、歴史的風土を活かした斑鳩町ならではの農・食・観光を一体化した、新たな地域農業の活性化を目指すものである。

②取り組みに当たっての課題

- ・都市化の進展に伴う農地の減少や農外就業による高齢化、担い手の減少、生産力の低下
- ・農地、歴史的風土の保全利活用、地域資源の活用と合わせた・観光・商工とも連携した地域の活性化
- ・地産地消の推進、交流による農と食の創出



③課題への対応方策

プロジェクトの組織体制は、農業委員会が中心となり、町・県・農協・農業組織やボランティアグループ等地域の皆さんと協力しながら、そば栽培・菜の花栽培・黒米栽培・ジャガイモ栽培の実証展示圃の設置を行っている。

取り組みにあたっては、見て食べる楽しみのあるそばや自然景観にとけ込む菜の花栽培を行うことになった。単に作物



プロジェクト会議

を栽培するだけでなく収穫後において、加工から販売までと、町農業の活性化・元気な地域づくりに向けて取り組んでいる。

プロジェクトの中心となるのが、栽培実証展示圃の設置で、そば・菜の花を地域の新たな振興作物にし、加工・販売も含めた地産地消や地域ブランドを目指している。

栽培については、遊休農地が多い地区や歴史的景観が損なわれている遊休農地をモデル展示圃に選定。

地元水利組合やボランティアグループに呼びかけ、そば・ジャガイモと菜の花・黒米栽培の管理を委託し、農業委員会は農業機械の提供や栽培指導に携わっている。

菜の花栽培に当たっては、地元小学校の子どもたちの収穫体験。そば栽培では、サポーターによる栽培の参加。また、ジャガイモ栽培については、幼稚園・保育園児らによる掘り取り体験やサポーターによる栽培の参加を行っている。

今後とも地域の人たちの関わりを深め、農業への理解と関心を高めながら農業の大切さを訴えて行きたい。



そば管理作業

地産地消・斑鳩ブランドを目指した商品販売

地産地消への試みとして、「農と食の活性化プロジェクト」で取り組みを進め、販売に関しては付加価値を高めるための袋詰めや商品シールのデザインなどもこのプロジェクトで行っている。

販売は、町の産業フェスティバルやそばピクニック、菜の花まつりや長野県・兵庫・大阪府の友好姉妹都市など各種イベントでの販売。このほか、町内の農産物直売所での一部販売委託を行っている。今後は、地元商工業者とも連携を図りながら新たな斑鳩ブランドの誕生に向けて進めて行きたい。

交流の輪 ー農と食の広がりー



そばピクニック・斑鳩そば試食

昨年からは、菜の花栽培に関わっているボランティア団体と農業委員会が協力し合っの「菜の花まつり」や農業委員会主催による「そばピクニック」と称した、お花見会の開催を行っている。

ピクニックは、三重の塔で有名な法輪寺に隣接する町営駐車場をメイン会場に、町内3か所のそば畑を巡りながら斑鳩の里をピクニック気分で散策し、楽しもうというもの。

メイン会場では、そば畑の説明や「いかるがそば」の試食。「そばドーナツ」「菜の花油」「黒米」の販売などを行っている。

また、産業フェスティバルでも各種栽培展示圃で誕生した、そば粉・黒米などそばピクニックと同様の商品販売。そば打ち体験・石うすによるそばの粉挽き体験なども行い、イベントを通じた交流による「農と食」の世界が広がっている。

小さい種から大きな夢がふくらむ

遊休農地が火種となって、農業委員会の取り組みも活発となり農業委員会の活動が住民の皆さんに目に見える形でわかるようになった。

遊休農地の解消に向けた取り組みは、誰かがいつかは何かをしなければならないことであり、その取り組みは今始まったばかりで長く続けることに意味がある。

町農業が活気づくため、行政、団体、地域住民のそれぞれが連携して試行錯誤をしながら進めて行くことが大切である。

農と食が一体化し、食べる楽しみも取り入れたプロジェクトの推進は、地産地消や斑鳩の新しい名物として「斑鳩ブランド・うまいもんづくり」のきっかけとなることが期待される。

また、農業も含め観光と商業が互いに手を取り合うことで、地域の活性化への期待も寄せられ、夢が大きくふくらむように、前例にとらわれることなく農業委員会が一丸となって推進して行きたい。